

第6章 表現力の豊かな指示 (pp.308-31)

リチャード・セネット『クラフツマン』

担当：K原

この章の概要 (メモ)

1. どう指示するか？どう説明するか？と、言葉の力について書いた章かな？
2. 指示や説明の仕方には大きく2種類あって、1つは文字・印刷物による説明。もう1つは対面で見せて説明すること。しかし、文字による説明は、いわゆる「説明書」的説明になってしまい、実際にやってみようとするすると全く「説明書」の通りにうまくいかない。では、文字による説明で大事なことはなにか？
3. 「語るな、見せよ (Show, don't tell)」と書いてあるが、「言葉ありきで語る (命令する) ように語るな、シーンを見せるように語れ」(ということだと読んだ)。その具体例として (セネット的にダメな例を含めて) 4人のレシピが出てくる。
4. 「表現力豊かな指示は、技術的クラフトを想像力に結びつける」(うまく仕事を伝達できるよってこと?)

指示の原理 (pp.308-12)

◆ 「語るな、見せよ」

<この章の導入>

- 自分の仕事についてうまく言葉で説明できない。どうすればうまく説明できるんだろう？ (p.308)
- 一見、教える側は言葉(文字)だとうまく説明できないし、教えられる側も言葉(文字)通りにやってみようとするけどどううまくいかないのか、じゃあ同じ場所にいると尋ねればいいじゃん、やっぱり対面のほうがいいじゃん、というようにも思う。が、しかし、その場合その場にはいないといけないし、対話も理路整然としていないので、印刷物が全くダメというわけでもない。
- 大事なことは、「文字による説明書を伝達可能にすることー表現力豊かな説明書を創ることー」 (p.309)

<言葉から入るとうまくいかない？>

- 「なぜうまく自分の仕事をうまく説明できないのか」という問題には、生物学的側面がある。手の活動を言葉の使用に関連づける諸研究には、言葉による インストラクション 指示 と手振りとの連携に注目したものがある。

- 神経学者フランク・ウィルソンは、まず失行症（＝脳の損傷により、意志はあるのに行為を完成できない）を治療する。そのあとで失読症（＝言語中枢の損傷により、言葉を使用したり理解できない）を治療したほうが、その助けになると提案した＝身体的技術を回復させたほうが、説明書の言葉を理解するのに役立つと提案（p.309）。「言葉の基盤となるのは、身体的動作である」（p.310）
→つまり、言葉の前にまずは身体的動作があった、ということか。取扱説明書を読むような、完全な初心者（（その仕事での）身体の動きを全く知らない・理解していない人）は、まず言葉から入ろうとするので、難しい、ということを書いたかったのかな。
- まず手の活動（＝身体的動作）があって、そこから言葉は生み出された。具体的には、動詞は手の動作から、名詞はモノを名前として hold し、副詞と形容詞は、手工具のよように動作と対象物を modify する（p.310）
- 言葉と手振りの連携の話の続き。手話者は、その手の動きが抽象的な信号（サイン）を作るのではなく、言葉の概念を身振りで例示している。これは、セネットにとってはパントマイムの技芸や活用を想起させるものらしい。
- Deaf にとっての歌手と、音声言語話者にとってのパントマイムは同じ（ということなのか？）（＝身体を動かし、ディスプレイをしている存在）（pp.310-1）
→パントマイムと手話者の例を出すことによって何を示したかったのかがうまく読み取れなかった。先行研究について紹介したよ、ということ？手振りによる instruction には、「説明」ということだけではなく、ことばの概念を例示することに関するものもあるよ、ということを書いたかったということ？これが「語るな、見せよ！」につながるということ？

セネット「語るな、見せよ！」

<言葉・文字について>

- セネットの言う「語る」とは…
例：「彼女は落ち込んでいた」（p.311）
→「感情を断言的に語」っている、って書いてあるけど、これって感情を語っているからダメ、というよりも身体の動作に全く注目してないからダメ、っていうことなんじゃなくて？というか、さっきのはじめに身体的動作があって次に言葉があった、ということになると、「彼女は落ち込んでいた」という言い方はできないことになるな…
- セネットの言う「見せる」とは…
例：「彼女はのろのろとコーヒーポットのところまで歩いて行ったが、手に持ったカップが重たく感じられた」など（p.311）
身体的表現に注目しているのだから、「私たちには重い気分がどんなものであるか見える。」

<言葉・文字のない単なる身体的動作から学ぶ場合の欠点について？の話>

- 作業場で、親方が手順を行動で示している時、その親方のディスプレイが指針になるが、その時徒弟は実演を見て学ぶことになる。これは、徒弟にとっては負担。模倣できると

ということが前提になっている。さらに、親方はもうマスターしてしまっているのに、ミスができない。実演するものから何を自分が吸収すべきかを見極めるのに大変な努力が必要になる。(pp.311-2)

- 文字で書かれた指示的な言葉は、体で覚えろ！的などころをより具体的・明確に示すことができる。だから、どのように言葉によって指示するかについて、レシピという具体例を用いて考えてみよう。(この話をする事によって、クラフツマンシップにおける想像力の役割という論点が導入されるとのこと。)

書かれたレシピ (p.313-30)

「アルブフェラ風チキンのレシピ」が4つ登場する。

「アルブフェラ風チキン」とは…

骨を抜き、詰め物をしたチキン (リンク先はあくまで見た目のイメージです。中身やソースなど少しずついろいろと違いそうです)。アルブフェラ湖は、スペイン東部にある都市バレンシア南郊の湖。ナポレオン戦争時代(18-19世紀)、ここでフランスがイギリスに勝利した重要な戦いがあったらしい。この時活躍した将軍のために、創作された料理の中で最も有名なのがこのアルブフェラ風チキンとのこと。要するにナポレオン戦争時代に創作されたフランス料理の1つ。

デッド・デノテーション

◆ 指示対象の喪失ーチキンの災難 (pp.313-17)

- 1人目の料理人：リチャード・オルニー (プロヴァンス系アメリカ人) のレシピ (詳細は p.314)
→ (セネット的に) 全然ダメ。初心者にとっては全く指針にならない。なぜなら、オルニーの言葉は語ってしまっていて、見せていないから (=身体的動作とかけはなれてしまっているから？いわゆる取扱説明書のように、言葉が単なる命令になっているから？)。
- こんなとき、どうすればよいか？1つの解決策は、あまりにも自明で、使い慣れてしまっているせいで自然としか思われていない知識 (=暗黙知) を意識の表面に上らせて書くこと。直喩や隠喩、副詞などによる表現によって、むしろ暗黙知は活用できるようになる。 (pp.315-7)

「指示対象の喪失」がなんなのがよくわからない。Dead denotation とは、denotation : その言葉が示す字義通りの意味 が dead : 死んでいる、失われているということだと思うが、これはオルニーの例からすると、そこで使われている言葉そのものの意味が単なる命令となり、死んでしまっているということと合っているのか？というか、ここはむしろ connotation (言外の意味) について話している・これから話すのではなくて？(比喩とか想像力とか出てくるのでそう思いました) 表現に富んでいる = 指示対象は喪失されていない、ということみたいだが、ここで言う「指示対象」ってなんなの？

ここからは、暗黙知がどう表現力に溢れた説明書になりうるのかを明らかにする。そのために、現代の3人の料理人のレシピを紹介する。(ここから登場する3人は皆表現に富んだレシピの書き手である。しかし、表現に富んでいるから完璧!というわけではないよう)

◆ 共感的例証—ジュリア・チャイルドのアルブフェラ風チキン (pp.317-20)

- 2人目の料理人：ジュリア・チャイルド（アメリカ人）のレシピ（詳細は p.318）

彼女は、「共感しようと努めながら教育的な文章を書こうとする者」（p.319）

<チャイルドがこのレシピを教えるに至った経緯>

- 1950年代 アメリカの食品の産業化（p.317） 美味しいく加工されパック詰めされた食品、昔からのアメリカ式クッキング<郊外型シェフの海外に新しい着想を得た料理
- そこで、チャイルドは異国（この場合はフランス）の料理をアメリカ人へ紹介するに至り、フランス人以外の初心者にとってもわかりやすいようにレシピを改変した。

<チャイルドの説明の仕方>

- チャイルドはテレビ料理家で、ひとつの作業から次の作業への手の動きを理解しやすくするためにクローズアップの手法を用いたパイオニアだった。彼女のレシピは「調理をする人間への感情移入 empathy を中心に構成されている」（p.318）
- 彼女のレシピの言葉は「類推 analogy でいっぱい」「（それは）正確というより曖昧 loose」（p.318）

<「類推 analogy でいっぱい」であることの効果＝共感を示す>

- 「……のようなものではある」「……と全く同じようなものではない」という言い方により、1) 頭脳と手の焦点が行為それ自体に合うように仕向けられる。加えて、初めてすることが、昔どこかでやったことがあるぞ、と示唆することで2) 自信を呼び起こすことができる。

→たしかに、オルニーのレシピと比較すると、チャイルドのレシピのほうが、既知のものをよすがにして進めていけそうではある、とは思った。1) は、結局レシピの類推 analogy が曖昧で「じゃあ結局なんなんだ」というところは自分の行為の中にしか答えがないということだから、焦点が行為に向けられるということかな。

- 彼女は、「共感しようと努めながら教育的な文章を書こうとする者」（p.319）であり、これによってエキスパートは何が初心者にとって難しいかを予期しながら導くことになる。彼女のレシピは時に曖昧、時に詳細すぎるので批判もされているようだが、これは必要なことで、危険ポイントが数多く存在するために、そうなっているらしい。自分がエキスパートになる前の段階に感情面で回帰することが、共感のしるし（p.320）。
→類推 analogy することは、（初心者への）共感を示す

◆ 背景説明—エリザベス・デイヴィッドのベリショー又風チキン (pp.320-24)

3人目の料理人：エリザベス・デイヴィッド（イギリス人）のレシピ（詳細は p.321）

<デイヴィッドがこのレシピを教えるに至った経緯>

- WWII 後の英国はアメリカよりもはるかに食糧が少なく、料理人は野菜を茹で上げて降伏させるべき敵として野菜を扱っていた（本当かよ、と思わなくもないけどとりあえず進もう…）。これは悲惨だということで、この状況を改善するために異国流の調理法を教えることにした。

<デイヴィッドの説明の仕方>

- 上記の理由により、デイヴィッドは読者を異国に連れていかなければならない。
- このような時、デイヴィッドは文化的背景を呼び起こす物語を語る（＝背景説明）ことで、技術テクニックを授けようとする。（例「まず、フランスのベリー地方のシェフが、復活祭イースターまでには卵を産めなくなる老いた雌鳥をどうしたものかと思案している姿を再現する」（p.321））この物語を読んだら、もう本を参照しないで料理にとりかかることができるようになる。この物語は、既読の手順として機能する。

<背景説明シーン・ナラティブであることの効果＝ショックを与える>

- デイヴィッドは「異境に暮らす人びとがするような事柄を行うためには、その地にクラスとはどのようなものであるのかを、何よりも真っ先に想像することが必要であると信じていた」（p.322）
- 背景説明は、まるで教育的なおじさんがいるようなもの。おじさんはある場所に連れて行き、細部は明快だが意味は不可解な風景を見せてくる。読者にとって馴染みのないものを脳裏に刻ませる「読者にショックを与える」（p.324）
- ただし、この方法はテクニックがわかりづらい。とにかくショックを与えることに注視している（しすぎている）。本来の目的であるはずの料理を作るのではなく、いかに読者にショックを与えるか（おじさんロジックの適用）が目的になってしまっている。中心（本質）から読者を逸らしてしまっている。

→デイヴィッドの試みは面白いけど、あくまでも「テクニックを授けようとする」ところどまりで、一回物語を読んで「よし、ご飯作ろう」とご飯の準備にとりかかろうとして「で、まず何するんだっけ」となりそう（本当にこれ読んでチキンを作れるようになるのか疑問に思う）。たしかに読者には強烈なインパクトは残る。が、そのインパクトはなんのためのインパクト？となりそう。

◆ 比喩による教育ーベンショー夫人によるアルブフェラ風チキンのレシピ（pp.325-30）

4人目の料理人：ベンショー夫人（イランから亡命してアメリカ・ボストンへ）

<ベンショー夫人がこのレシピを教えるに至った経緯>

- ベンショー夫人は、セネットの料理の先生であり友人（マブダチ）だった。彼女は英語がうまくなかったが、驚くべき料理人で、ペルシア料理はおろか、フランスとイタリアの料理もマスターしていた。

- セネットは料理を習うが、なかなかうまくその場で体験的学習ができなかった（彼女は材料を英語でなんとと言うか知らなかったし、生徒のセネットたちも知らなかった。また、彼女はあまりにも手が素早く、一旦作業し始めると止まらなかった）。そこで、ベンショー夫人にレシピを書いてもらうことにした。

<ベンショー夫人の説明の仕方>

- 「あなたの死んだ子ども。……」で始まる（チキンのこと）（詳細は p.326）。とても詩的な表現で説明されている。これはベンショー夫人に特有のものではなく、多くのペルシア語のレシピはこうした表現がされているらしい。つまり、身体的行為に重い象徴的意味を与えるため、比喩が多く使われている。（p.331）

<比喩の効果＝本質への過程>

- 「あなたの死んだ子ども」→肉屋から直行のチキンを表すという単純な置き換えは×。ペルシアの文化的観点で読む必要もあるのではないか。しかしこの表現は料理人にとっては、手に警告を発しているものなのである（p.327）。決して骨を抜く時に皮を破ってはならないという技術的要領をおさえている。「食べ過ぎさせてはいけません」は、調理人自身の身体的嫌悪感を呼び起こす。
- 比喩の研究には2種類ある。1）比喩はそれ自体が目的になるとするものであり、それ自体で完結すると考えるもの（哲学者マックス・ブラック）。もう1つは、2）比喩は（何かの目的のための）一連の過程のようなものであるとするもの（哲学者ドナルド・デイヴィッドソン）。ベンショー夫人のレシピは2）のほう。比喩の1つ1つが、過程を意識的かつ熱心に熟慮するための道具になっている。

→ベンショー夫人の比喩は、（オルニーと比較すると）一見遠回りに見えて、実は本質（目的）を考えさせる過程になっている。

◆まとめ？（pp.330-1）

- ここまで、言語ツールについて話してきた。
- オルニー以外の3人は皆表現に富んでいて、それぞれの方法（共感的例証・背景説明・比喩）で指示対象の喪失 dead denotation を乗り越えている。表現に富む指示は、技術的クラフトを想像力に結びつける。
- 次は、物理的ツールについて話す。

どう書かれた文字によって指示・説明するとよいのか、具体的な内容で取り入れられるところはあるそうだし、比喩というものを改めて考えるきっかけになった。背景説明のデイヴィッドの例も、「素晴らしい」と絶賛しているわけではないところは重要な点だと思った。料理とは「おいしくある」べきもので、調理する人が調理をすることが必要なのだから（当たり前だが）、表現力豊かであるということに加えて、あくまで調理をする、というその身体的動作に注目しなければ、本質的ではない。